

第5章 中在家南遺跡の骨角器

工 藤 哲 司

中在家南遺跡ではⅧ・Ⅸ区河川跡の15層において、弥生時代中期の骨角器が発見された。沖積地からの骨角器の出土は稀な例であり、県内の貝塚からは多くの骨角器が出土しているが、縄文時代を含め仙台市内では初めての発見であった。本章では、特に狩漁骨角器を中心として、中在家南遺跡の地理的位置と貝塚との関係を考慮に入れながら、その特徴と合わせて骨角器に関わる生業について検討する。

第1節 仙台湾をめぐる中在家南遺跡の環境

Ⅰ 仙台湾と中在家南遺跡の位置

中在家南遺跡から東へ約5 km行くと太平洋を望む砂浜にでる。この砂浜は、南は相馬市の鵜の尾岬から北は松島湾を挟んで牡鹿半島の付け根まで南北約80 kmに渡って弧状に続いている。この間の、鵜の尾岬から牡鹿半島黒崎を結ぶ線の内側は大きく「仙台湾」と呼ばれている。仙台湾はさらに牡鹿半島黒崎から宮戸島間が石巻湾、宮戸島から花刈崎間の内陸に深く入り込んだ多島海が「名勝松島」で有名な松島湾と呼ばれている。

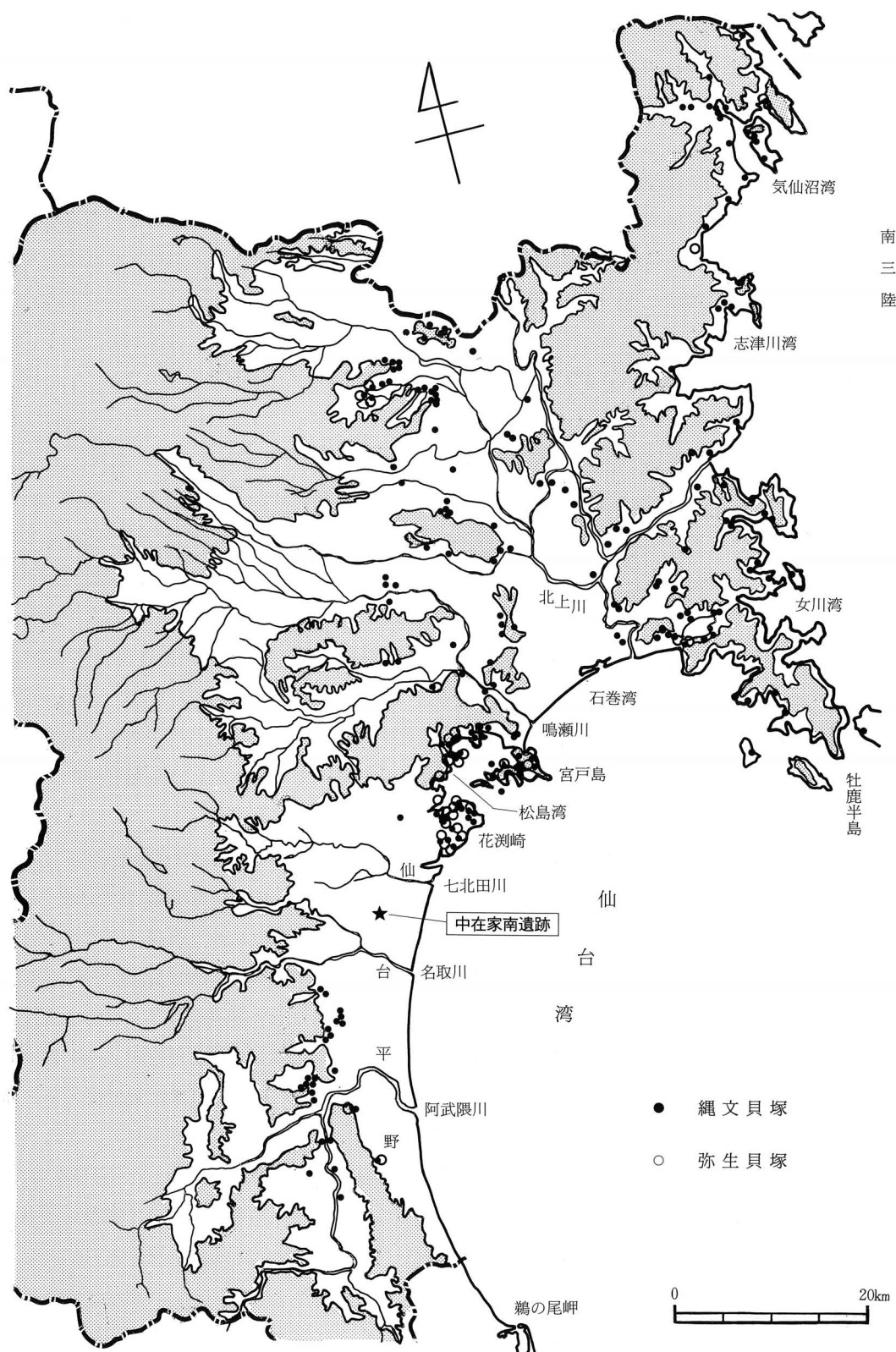
仙台湾に面する仙台港以南の沖積平野（仙台平野）は、今から約18000年前以降に形成され、特に約5000年前以降現在に至るまでは海岸線が前進している（注1）。仙台平野の中央部の名取川流域では河川の土砂の堆積量が多く、貝類の成育に適する砂泥層の形成された内湾部のような環境にない（注2）ために、現在仙台市内では貝塚は1カ所も発見されていない。これに対し、阿武隈川流域や松島湾岸及びその島々から南三陸地域にかけては、縄文時代以来多くの貝塚が形成されている。

仙台平野は、海岸線の前進に伴う沖積平野の地形変化により、海岸に沿って3列の浜堤列が存在し、現在の浜堤は約700年前に形成されたことと、中在家南遺跡の河川跡14・15層やⅣ区墓跡群の時期にあたる約2000年前の海岸線は、現在の海岸線より約2 km内陸の第2浜堤列に位置していたことは既に述べた通りである。

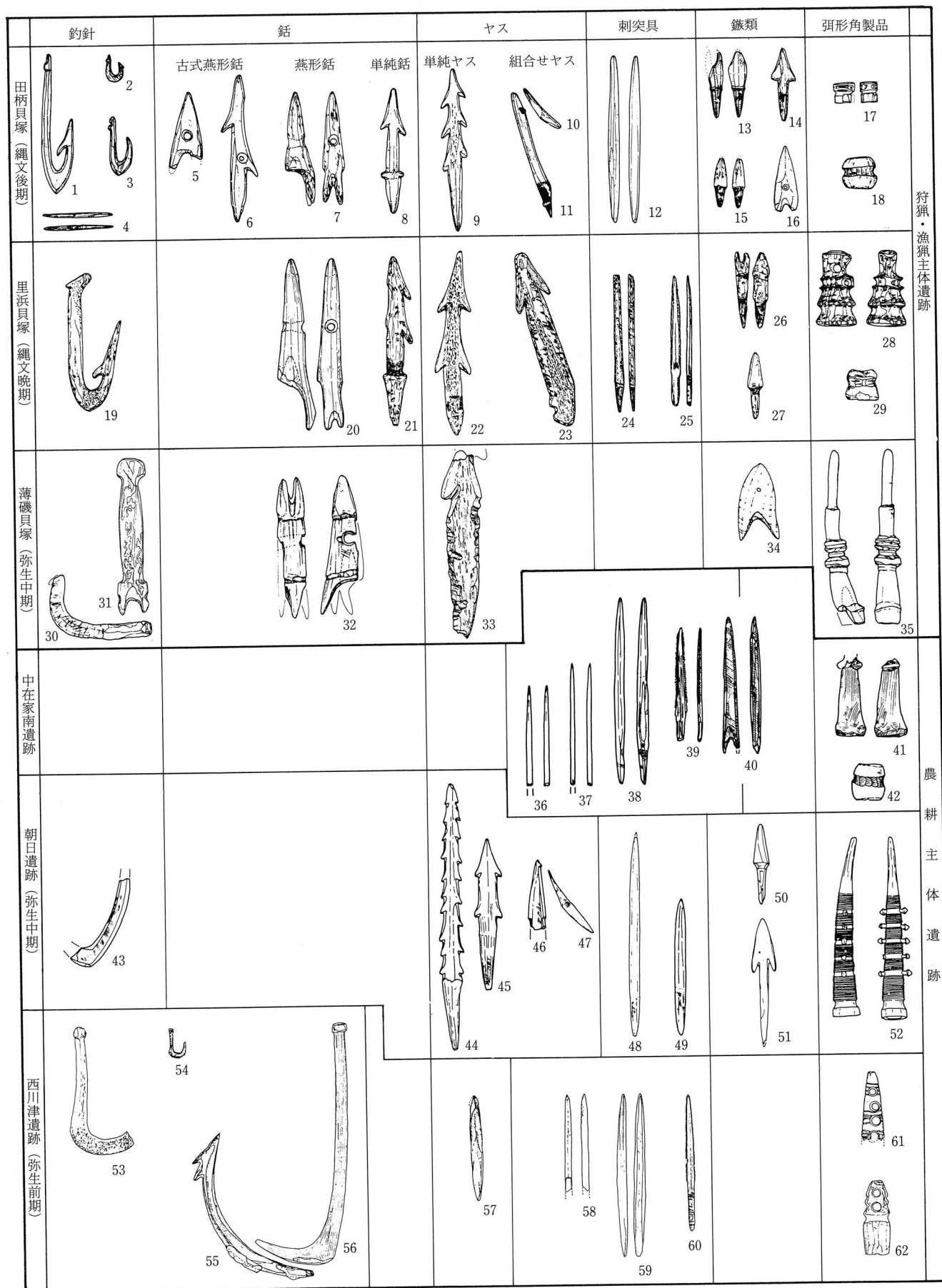
海岸線が今より約2 km内陸の第2浜堤列にあった弥生時代中期頃、中在家南遺跡は海岸から約3 kmと比較的近い位置にあったが遺跡から海岸までの間は（遺跡の立地する自然堤防と第3浜堤列の間及び第3浜堤列と第2浜堤列の間は）、後背湿地や浜堤間に潟湖性低地が形成され、かなり湿潤な環境にあり、現在のように簡単に海岸に出られる状況ではなかったものと推察される。直線的に海岸に出ても粗砂質の砂浜の汀線付近で得ることができる食料資源は、内湾の砂泥質の松島湾岸と比較するとかなり限定されたものであったと考えられる。また、鮭が遡上していたと考えられる名取川や七北田川まではどちらも約4 kmあり、魚貝類の獲得に適した松島湾や七ヶ浜の海岸までは13 km前後の距離にある。このようにみると、弥生時代中期段階の中在家南遺跡は、直線的に近い海岸は海産の食料資源に恵まれず、魚貝類の資源に恵まれた岩礁海岸や内湾部までには距離的に遠く離れているという海産資源にかかわる位置環境にあったことが伺われる。ただし、現在「大沼」・「赤沼」として残っているような潟湖性低地でも特に湿性の高いところには、漁労の対象となる淡水性の魚族が生育していた可能性はあったであろう。

2 縄文時代貝塚から弥生時代貝塚への変化

宮城県は全国的にも貝塚が多く、縄文時代から古代以降のものを含めて325ヶ所が確認されている（注3）。縄文時代の貝塚は、南三陸沿岸・北上川流域・松島湾沿岸・阿武隈川中流或に分布しているが、松島湾沿岸は特に濃密な貝塚地帯となっている。これに対して、阿武隈川下流域や、名取川流域と七北田川流域の地域には河口から段丘・



第1図 宮城県の縄文・弥生時代貝塚分布



第2図 中在家南遺跡関連、骨角器

丘陵部にいたるまで貝塚は発見されておらず、空白地帯となっている。

弥生時代になると、松島湾沿岸地域では、貝塚の規模が小さくなり分散する傾向がある（注4）が、以前として多数の貝塚が分布する。これに対して南三陸地域・北上川流域・阿武隈川中流域では貝塚の数が激減する。一方、縄文時代に遺跡は形成されながらも貝塚の空白地帯であった仙台平野には、中在家南遺跡をはじめ南小泉遺跡・藤田新田遺跡・高田B遺跡・富沢遺跡などの弥生時代の集落や水田関係諸遺跡が出現する。沿岸部での貝塚の規模の縮小・分散と、内陸部での弥生集落・水田跡の拡大は、弥生文化の受容・発展と密接に関わっているものと考えられる。

仙台平野の内陸部で稲作農耕が営まれるようになった段階における松島沿岸の貝塚の状況について、菅原弘樹氏の見解がある。氏の分析によると、松島沿岸の弥生時代の貝塚は、「マガキなどを主体とした組成の単純な貝層からなり、貝殻と製塩土器以外の遺物をほとんど含まないといった特徴をもつ貝塚」と「日常的な道具類や食物残滓などの多種多様な遺物を出土する貝塚」があるとし、前者を「製塩貝塚」、後者を「生活拠点貝塚」とよび、製塩貝塚は、沖積地に集落を形成した稲作農耕集団による農閑期の夏場に季節的な出作り作業として行われた副次的な製塩とマガキやアサリの処理を行った遺跡として位置づけている。また、生活拠点貝塚は、縄文時代と比較して漁獲対象や漁具に明確な相違はないが、対象魚や貝の種類や量が少ないことや季節的な偏りがあることから、稲作農耕を受容しながらも季節的な分業の変化および半農・半漁集団の存在を示唆する遺跡として位置づけている。製塩貝塚は11遺跡、生活拠点貝塚は東宮貝塚1遺跡があることが指摘されている（注5）。

以上のように、弥生時代にも松島沿岸では縄文時代以来継続して貝塚が形成されるが、その主体は「製塩貝塚」と呼ばれ、製塩と貝の処理を夏場を中心として季節的に行った遺跡であるが、一部の貝塚では縄文時代と同じ漁具や狩猟具をもって漁労・狩猟・採貝を行っている。しかし、その活動の時期的・量的規模は、縄文時代と比較すると大幅に縮小し、季節的分業としての性格を強めている。

第2節 時代別・立地別の漁猟用骨角器の器種組成

Ⅰ 臨海遺跡と内陸遺跡の骨角器の器種組成

海産の貝を出土する貝塚のように、貝塚の形成期にあるいは現在まで海岸に接近して立地する遺跡を臨海遺跡、中在家南遺跡のように海岸から離れて内陸部に存在する遺跡を内陸遺跡と仮に呼ぶことにする。狩猟を対象とする骨角器の発展は縄文時代後・晩期に頂点に達し、漁猟対象の相違によって各種の器種が製作されている。本節では仙台湾・南三陸における縄文時代の臨海遺跡での器種構成の確認と、これに対する弥生時代の各地の臨海遺跡における器種組成等の変化、及び内陸遺跡である中在家南遺跡の器種とを時間的・空間的に比較することにより、中在家南遺跡の骨角器の特徴を導きだすこととする。

Ⅰ) 縄文後・晩期の臨海遺跡の骨角器の器種組成

宮城県沖は、暖流と寒流が衝突し、現在でも「三陸沖」と呼ばれる良好な漁場として知られている。湾岸から沖合までの好漁場を眼前とした松島湾から三陸地域にかけての縄文人は、貝採りとともに様々な骨角器を製作し、漁猟活動を行ってきたことは周知のとおりであり、その所産は貝塚という臨海遺跡に残されている。

縄文時代後期の代表的資料としては田柄貝塚がある（注6）。漁猟用骨角器としては釣針・鉞・ヤス・刺突具・鏃（根ばさみを含む）がある（第2図）。釣針は、J字伏のものが各種の大きさあるほか、一字状の真っ直ぐなものもある。鉞は、南境型（5）や沼津型（6）と呼ばれる古式の燕形鉞と根ばさみの形成されたものを含む各種の燕形鉞、軸部の下部に綱を掛けるための突起や溝を彫っただけの単純鉞などがある。ヤスは、先端から基部まで一本の素材

で作った大小の単純ヤスと軸部と^{えび}鎌を別に作って合わせ、さらにこれを組み合わせて機能させた「挟み込み式ヤス」と呼ばれるもの(10・11)がある。刺突具は、棒状のもので長さ5 cm程度のもので25 cmを超すものまであり、中在家南遺跡の刺突具に比べると太いものが多い。鎌には、有茎式と無茎式があり、先端の形状は様々ある。また先端に石鎌を挟んで使用した根ばさみ(13)もある。

縄文時代晩期の漁猟用骨角器としては里浜貝塚西畑地点(注7)の資料がある(19～27)。釣針・銚・ヤス・刺突具・鎌(根ばさみを含む)の大別器種構成は後期と変わりはない。古式の燕形銚はみられず、燕形銚と単純銚に収斂する。挟み込み式ヤスはなく、代わって基部が斜めに加工された組み合わせヤス(23)がある。刺突具には骨幹を利用したもののほか、エイの尾棘製のものがある。鎌は、有茎のものが各種出土している。

このように縄文時代後・晩期には、釣針から銚・ヤス・刺突具まで各種の形態が大小様々あり、それぞれの器種・形態のものが多量に出土している。細かく分化した器種や形態・大小の差は、狩猟の対象とする魚種や海獣の種類・狩猟方法によって、各骨角器が細かく使い分けられていたことを示唆しているものと考えられる。

2) 弥生時代の臨海遺跡の骨角器の器種組成

弥生時代の臨海遺跡として、資料が比較的整っている遺跡には福島県薄磯貝塚がある(注8)。この遺跡からは弥生時代中期の組み合わせ式釣針・燕形銚・単純ヤス(単純銚の可能性もある)・猪の牙製の無茎式鎌が出土している(30～34)。しかしながら薄磯貝塚の主体となる縄文時代晩期の骨角器の出土量と弥生時代中期の骨角器の量を比較すると、その個体数は激減している。

松島湾の臨海遺跡としては、先に挙げた東宮貝塚があり、弥生時代中期の骨角器としては、燕形銚と刺突具等が出土しているが、その数は少ない(注9)。

次に、東北地方以外の弥生時代遺跡での狩猟用骨角器の出土状況について簡単に検討する。

島根県西川津遺跡は、宍道湖の湖岸に立地する各種木製農耕具や所謂弥生石器を出土する弥生時代前期の遺跡である(注9)。遺跡内にはヤマトシジミを主体とし岩礁性の貝類を含む貝層も形成されている。骨角器としては、大型の組み合わせ式のものを含む各種の釣針や刺突具が出土している。大型の組み合わせ式釣針を使用する外海までは宍道湖を通り抜けなければならないが、そのような釣漁や刺突漁業や網漁、貝採りも行われており、稲作農耕とともに狩猟も盛んに行われていたことを物語っている。

愛知県朝日遺跡は、弥生時代中期から後期を中心とする環壕集落と大規模な方形周溝墓群がある。当時の海岸線は遺跡から5 km前後のところにあり、遺跡の近くを庄内川とその支流の五条川が流れる。遺跡内の谷地形などにはマガキやハマグリを主体とする貝層が形成されている(注11)。骨角器としては、釣針・各種の単純ヤスと挟み込み式ヤスと考えられるもの(46・47)・刺突具・各種の鎌が出土している。遺跡からは各種の魚骨や鳥・獣骨も出土しており、大規模な農耕集落であるが、蛋白源の確保のために伊勢湾などにおける漁労や狩猟も行われている。

以上のように、宮城県沿岸や福島県沿岸の臨海遺跡では、縄文時代から弥生時代になると、同じ臨海遺跡であっても、先に松島湾の貝塚の状況おいてふれたように遺跡の規模の縮小に伴って、骨角器は器種・出土量とも減少する。しかしながら、大型の釣針や銚・ヤスを使用した縄文的な生業活動は小規模ながら踏襲されいたことが確認された。漁猟の対象は、大型の組み合わせ釣針や燕形銚の存在から大型の魚類等を主体とした可能性が高い。

東北地方以外の各地でも、稲作農耕を生業の主体とする遺跡であっても臨海性の遺跡では縄文貝塚と比較すると規模は小さいが貝塚(貝層)が形成され、大型の組み合わせ釣針等や銚・ヤスを使用して外洋における漁労活動が行われていたことが伺われる。

3) 内陸遺跡の中在家南遺跡出土骨角器の器種組成

弥生時代中期の中在家南遺跡は、当時の海岸から約3 km 程内陸に立地していたが、直線的に海岸に出るには浜堤間の潟湖性低地に阻まれていた。水上交通路としての河川までは南の名取川、北の七北田川とも約4 km の距離にあり、川にでてもそこからさらに川を下らなければ海に辿り着くことができず、実質的には内陸性の遺跡として位置づけることができる。

中在家南遺跡の漁猟用骨角器には、漁猟刺突具として記載した細長い針状のもの16点と、エイの尾棘製品や鏃状のものを含む扁平な棒状のもの6点の合計22点がある。釣針・鉾・ヤスは出土しておらず、縄文貝塚・弥生貝塚・臨海性の弥生集落等と比較すると漁猟用骨角器の器種組成に欠落がある。

刺突具は、針状のものも棒状のものも完形品が少ないが、前者の残存長は最大で10.7 cm、後者の最大長は10.4 cm である。刺突具の出土量が多く、全長が15 cm を超えるものが多数含まれている田柄貝塚や朝日遺跡のものと比べると短いものが一般的である。また、針状のものは、直径が3 mm 以下のものが7点、直径4～5 mm のものが9点あり、太さの点では、朝日遺跡のものと比べると差はないが、直径(幅)が5 mm を超えるものが一般的な田柄貝塚の刺突具と比べると細いものが一般的である。

2 中在家南遺跡出土漁猟用骨角器の特徴

これまで、①. 生業の多くの部分を漁猟活動に依存する宮城県沿岸の縄文時代の後晩期の臨海遺跡からは、釣針・鉾・ヤス・刺突具・鏃類などの各種の漁猟用骨角器が種類・量とも豊富に出土している。②. 弥生時代の東北地方の臨海遺跡は、貝塚の規模は縮小するが、釣漁・鉾漁・ヤス漁などにより大型の魚種や海獣を中心とする季節的または専門的な漁猟活動が行われている。③. 弥生時代の農耕集落においても、臨海性の遺跡からは各種の釣針やヤスなどの海生の魚類を対象とする漁猟用骨角器や魚骨も出土し、海に出ての漁猟活動が行われたことを示している。ことを確認した。

これに対して、中在家南遺跡とその骨角器については、a. 中在家南遺跡は比較的海岸に近いが、地理的にまた海岸部での貝採りや漁猟環境に恵まれず、内陸遺跡と位置づけられる。b. 漁猟用骨角器は刺突具に限られ、釣針・鉾・ヤス・鏃が欠落し器種が貧弱である。c. 刺突具も、他遺跡と比較すると短くて細い。という特徴が挙げられる。

このような中在家南遺跡出土漁猟用骨角器の特徴から、当時の住人は、木製品の櫓が出土していることから舟は使用していたと考えられるが、縄文・弥生貝塚人および臨海性農耕集落の弥生人のように、仙台湾に漁のために舟を繰り出し、釣魚をしたり鉾やヤスを突いて漁をするようなことはなく、近くの河川や沼地など内陸部において比較的小規模な漁をしていたものと考えられる。ただし、河川跡からカキ殻が多量に出土していることから、松島湾沿岸ないし七ヶ浜沿岸に一時的に遠征してカキの採取を行うことがあったことも事実である。

なお、中在家南遺跡からは弥生時代中期の土錘・石錘は出土しておらず、網漁が行なわれた形跡もない。

第3節 弭形角製品について

1 田柄貝塚と里浜貝塚の弭形角製品

田柄貝塚からは、縄文時代後期中葉から晩期初頭の弭形角製品が合計50点出土している。いずれも底面から上面に貫通孔の開いたいわゆる「浮袋の口」と呼ばれる形態のもので、「角形」と呼ばれる長い円錐状の本体の底面に同じく円錐形の穴を彫って装着部としたものは出土していない。単純な中央部の括れた円筒状のものが主体であるが、この他に装飾の彫り込みのあるものや、側面に突起が造り出され、その突起に弓への装着穴に直交する方向の孔が開けられたもの(第2図17)が存在する(注13)。

里浜貝塚の弭形角製品は、縄文晩期中葉のものが21点出土している。その内、浮袋の口と呼ばれる形態のものが18点、角形状でやや長い円筒状の本体の底面に円錐形の穴を彫って装着部としたもの(28)が3点出土している。浮袋の口形のものは、田柄貝塚同様に、単純な中央部の括れた円筒状のものが主体となり、側面に造り出された突起に横方向の孔が開けられたものもある。円筒状の装着孔が貫通しないものは、上部が板状に加工され横位の貫通孔が開けられるほか、板状部と円筒状部の境に造られた突起にも上部の孔と平行に横方向の孔が開けられているものがある(注14)。この段皆ではまだ弭形角製品の頂部は角状に尖ってはならず、平坦に加工されている。

2 弥生時代と中在家南遺跡の弭形角製品

弥生時代になると関東以西の地域からは、第2図52・61のような角状に尖った円錐形の本体に円錐形の装着用の穴の彫られた弭形角製品が出現し、一般化する。ただし、弥生時代前期の西川津遺跡には、里浜貝塚の28のような円筒状を呈し、板状に造られた上半部に横方向の孔が開けられたものも存在する。弥生時代の弭形角製品には、本体を巡り多数の沈線が彫られるほか、長軸に直交する孔が開けられて栓状の飾りが付けられるもの(52・61)が多い(注15)。

東北地方の弥生時代の弭形角製品は、中在家南遺跡(41・42他8点)のほか薄磯貝塚と東宮貝塚から各1点出土している。いずれも弥生時代中期の製品である。中在家南遺跡には完形品はないが、単純な浮袋の口形のもの1点(42)と角形のものの破片が7点出土している(41他)。角形のものには沈線による文様や栓状の飾りは付けられていない。薄磯貝塚の弭形角製品は、中央部に数条の隆帯が造り出され、そこから先端までは中程に段が形成されて細く仕上げられている(35・注16)。東宮貝塚出土の弭形角製品は、中在家南遺跡の42のような本体中央付近の両側に1対の突起が造り出され、突起から先は薄磯貝塚の35のような段がやや先端よりに形成され、細長く仕上げられている(注17)。薄磯貝塚と東宮貝塚の弭形角製品には、ともに沈線による文様や栓状の飾りは付かない。

以上のように、中在家南遺跡の弭形角製品は、縄文時代以来の「浮袋の口形」の弭形角製品が存在する一方、縄文時代には見られなかった「角形」の弭形角製品が加わる。中在家南遺跡の「角形」の弭形角製品は、松島湾の東宮貝塚や福島県の薄磯貝塚に類例が求められ、両貝塚の弭形角製品のような中央に1対の突起ないし隆帯が巡り、そこから先は細く尖る形態のものが弥生時代中期の東北地方の南太平洋岸では一般的であったと推察される。このような弥生時代中期の東北地方の「角形」の弭形角製品は、縄文時代晩期の里浜貝塚のものとは断絶がある。晩期後葉から弥生時代前期の資料がないので、その出自は明らかでない。長い円錐形を呈する点では弥生文化の中で生成された61や52のような形態の影響を受けたことも考えられるが、弥生的な形態を全面的に受容してはいなかったようである。しかし、弥生時代中期以降になってから東北地方でも弥生の「角形」の弭形態は受け入れられたようで石巻市五松山洞窟遺跡からは6世紀後半から7世紀前半のものと考えられる沈線文と栓状の装飾のある弭形角製品が出土している(注18)。

注 記

注1 松本秀明 1994 「仙台平野の成り立ち」『仙台市史 特別編1 自然』仙台史編さん委員会

注2 安田喜憲 1978 「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の住居」『東北自動車道関係遺跡調査報告書I』宮城県文化財調査報告書第52集 宮城県教育委員会

注3 藤沼邦彦・小井川和夫 1989 「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集25』東北歴史資料館

注4 岡村道雄 1982 「里浜貝塚I」『東北歴史資料館資料集5』東北歴史資料館

注5 菅原弘樹 1991 「東北地方の弥生時代貝塚 ―松島湾沿岸貝塚群からみた弥生時代の生業―」『考古学ジャーナル

No.336』

- 注6 阿部 恵他 1986 「田柄貝塚Ⅲ 骨角牙貝製品 自然遺物編」『宮城県文化財調査報告書第111集』宮城県教育委員会
- 注7 小井川和夫他 1985 「里浜貝塚Ⅳ」『東北歴史資料館資料集13』東北歴史資料館
- 注8 大竹憲治 1988 「薄磯貝塚」『いわき市埋蔵文化財調査報告第19冊』福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育文化事業団
- 注9 宮城県塩釜女子高等学校社会部 1965 「宮城県宮城郡七ヶ浜町東宮鳳寿寺貝塚の調査報告」『貝輪 2』
後藤勝彦 1991 「東宮貝塚」『多賀城市史 第4巻 考古資料』多賀城市史編纂委員会
- 注10 内田律雄・江川幸子 1989 「西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3）」島根県教育委員会
- 注11 石黒立人 1991 「朝日遺跡Ⅰ」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
森 勇一 1992 「朝日遺跡Ⅱ（自然科学編）」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 注12 宮腰健司 1992 「朝日遺跡Ⅲ」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第32集』財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 注13 注6に同じ。
- 注14 注7に同じ。
- 注15 注10・12に同じ。
- 注16 注8に同じ。
- 注17 注9に同じ。
- 注18 三宅宗議 1988 「五松山洞窟遺跡」『石巻市文化財調査報告書第3集』宮城県石巻市教育委員会

参考文献

- 岡村道雄編 「貝塚と骨角器」『日本の美術 No.356』1996
- 後藤 明・馬目順一也 「骨角貝器」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣 1983
- 和田晴吾他 「漁獵具」『弥生文化の研究5 道具と技術Ⅰ』雄山閣 1985